05. 糸の魅力による宝島

朝倉美津子

国際研究集会エクスカーションの際、私のアトリエを見学いただいたときのことである。手機数台の周りに染め上げたばかりの沢山の糸枠(かせ)や糸玉がある部屋に、30 名近くお集まりいただいた。そのとき参加者の一人によちよち歩きの赤ちゃんがいた。部屋に入ったとたんご機嫌になり、その様子がとてもかわいらしく興味深くて、皆でその様子に見入った。こちらが話に夢中になってしばらく目を離していて、はっとその赤ちゃんに目をやると、糸玉に頬を付けてじっとおとなしくしていた。柔らかくきれいな色や、糸がもつ温もりの感触が心地良いらしい。糸を撫でて嬉々と楽しむその姿に、糸や織物は人間の気持ちを温かく包むということを、その場にいた誰もが改めて実感した体験だった。

織物は触覚的・感覚的にも人に癒しをもたらす。タピストリーの本場は西洋であるが、タピストリーが発展した理由として、西洋の石造の建築には寒さ除けのために必需品だったということが挙げられる。温度だけでなく、このような織物がもたらす感覚的な温もりも重宝された理由ではないだろうか。

また中世ヨーロッパ文化を熱くしたのも、全盛を極めたタピストリー文化だった。その後タピストリーはルネッサンス以降絵画に地位を奪われたが、19 世紀末にウイリアム・モリスからタピストリー再生の動きが始まった。これは工業化への反動から再び生活に温もりが求められるようになったことが原因であった。そして、アール・ヌーボーやユーゲント・シュティール、さらにバウハウスへと続いていくこの動きを通して、現代の建築物の中における糸や織物の役割が再発見されていった。ヨーロッパ中で芸術としてのタピストリーへの新たな関心が急速に広がり、現代タピストリーは 1960 年代から 70 年代にかけて最盛期を迎えた。

折しもその頃、西洋とは対極的な日本で生まれ育った私は、日本建築が勢いよく西洋化していく時代の中で、糸の声を聴きながらタピストリーを創りだした。ただ、西洋で長い伝統をもつタピストリーと、同じくきわめて洗練された京都の染織文化という二つの文化の狭間で、私はそのどちらに対しても距離を置き、しかもそのどちらにも大きな影響を受け、互いの良い部分を敢えてクローズアップするような制作をしてきた。

私のこれまでやってきた仕事は、京都の染織文化特有の美学・感性を頼りに、糸という素材や、美しい色に拘ってきたものであるが、これは、日本人がタピストリーというきわめて西洋的なものに取り組むという点において、また京都の染織文化のなかで西洋的なタピストリーを創るという点においても、本流には属さない制作スタイルだ。あらゆる正統派から距離を置く海賊的行為と言えるだろう。

私は、自身の手で糸を染めて織りあげて、建築空間を豊かにする染織タピストリーを目指してきた。糸が本来もっている見失われがちな魅力を集めた、宝島を構築しようとしてきた。

時がたち1990年代以降、タピストリー文化は再び廃れてきたともいわれており、また着物離れによる京都の染織文化の斜陽化も叫ばれている。そんな中にあって、私の宝島のあり方についても、なお模索が続いている。ただ人間にとって、糸がもつ癒しの大切さは、これからも変わらないだろう。その本質的な魅力を活かすことができるよう、これからも私は糸の声を聴き、染めて織り続ける。